完了報告書（平成 22 年度）

提出者　　安井大輔

提出年月日　2011 年 3 月 31 日

【プロジェクト名】

和文

文化接触領域の食からみる家族と伝統

英文

Family and tradition through food of cultural contact zone

【メンバー構成】

研究代表者　安井大輔

幹事　　同上

メンバー　　同上

【ねらいと目的】（600 字程度）

本研究は、**食**を媒介として**コンタクト・ゾーン（文化接触領域）**における**家族**と**伝統**の変容に取り組むものである。日本社会の多文化化を担う**移民**の日常的生活世界を分析するため、家族の食卓という親密圏、祭りの行事食という公共圏における文化の維持/変容の問題を対象とする。

フィールドは横浜市鶴見区の臨海地域である。当地域は 1930 年代から沖縄本土移民の集住地であり、1990 年の出入国管理法の改正以降、ブラジル・ボリビア・ペルー等から沖縄出身日系人の二世、三世たちが多数移住するようになった。そして現在は、沖縄と南米、および日本の文化が混交する、ホスト/ゲストの二者関係に還元されないより複雑なコンタクト・ゾーンとなっている。

多文化混住のインパクトを考察する本研究は、食を分析項目とする。具体的には、地域の家庭（親密圏）における食事や祭りなどの行事（公共圏）における食を取り上げる。本研究では、変化のただ中にある地域社会の食を切り口に、新旧両移民の食による文化実践の位置付けやその変化について考察する。そして、移民の増加に伴う社会変化の社会学的意義を地域社会の多文化性や家族、伝統行事という視点から再考していくことを目指す。

【活動の記録】

申請者は、主に 6 月から 10 月にかけて断続的に対象地域である横浜市鶴見区に滞在し、沖縄系住民、南米系住民の各家族へのインタビューを中心とした家庭食の調査を行った。また 8 月に鶴見道じゅねー、9 月に沖縄県人会運動会にスタッフとして参加しつつ参与観察を中心とした行事食の調査を行った。具体的な内容は以下の通りである。

（ｉ）家庭食の調査：沖縄・南米の食文化の継承と混交の実態について、前年度までの調査で知り合った地元商店街の人々を通じて、地域住民へのインタビューを行った。その際可能な限り実際に食が営まれる場で参与観察を行った。（ⅱ）行事食の調査：対象地域では移民集団のコミュニティごとに伝統行事が開催されている。これらの行事に供される食事の実態やその文化的、宗教的意義などについて、行事を担当する沖縄県人会やエイサーサークルや NPO を通じて、参与観察とインタビュー調査を行った。

【成果の概要】（800 字程度）

食事情に関する調査成果を以下にまとめる。

（ⅰ）家庭食について：沖縄系の住民が沖縄料理を食べる頻度や量は総じて減少傾向にあるものの、年齢や本土居住年数によって異なる部分も大きい。摂取減少の理由は特に年齢層によって異なる。青少年・中年層は学業や仕事で忙しいため時間のかかる昆布や豚肉料理はあまり作らない。一方で高齢者たちは沖縄時代の芋中心だった故郷の料理にいい印象を持っておらず和食好きという声も聞かれた。南米系の住民には、沖縄出身の親が現地の食材を工夫して作った沖縄風南米料理を好む例が確認された。

（ⅱ）行事食の調査：エイサーサークルなどでは地縁血縁的には沖縄人でない人々によって沖縄料理が外食されているのに対し、こちらも沖縄系住民の間で摂取は減少傾向にある。沖縄県人会の運動会の打ち上げなどの場では、かつては婦人部による手作りのテビチなどが提供されていたが、高齢化と世代交代により、現在は出来合いのパーティセットなどに変更されている。南米系行事はここ数年不況のためほとんど実施されていない。

これらの調査結果と並んで、沖縄系住民と南米系住民には、食を含む伝統文化についてのクレイム申し立ての有無の違いも見られた。エイサーなどの行事は継続されているにもかかわらず沖縄系住民からは「沖縄文化は失われている」といった訴えの声が良く聞かれるのに対し、不況のためフェスタ・ジュニーナなどの行事が全く行われていない南米系住民から、文化的危機の訴えられない。この状況の背景として、それぞれの住民の置かれているエスニック状況を読み取ることもできる。沖縄系住民は日本人と同等な地位にあることを求められる、すなわち日本社会へ吸収されることへの抵抗感から伝統の危機が訴えられるとも考えられる。逆に南米系住民は、逆に同化圧力への抵抗を発揮する場がない、つまりそのようなクレイム申し立てとして伝統を維持する必要性を感じていない状況が考えられる。この背後にはそもそも日本人との接触がない「顔の見えない存在」となっている南米系住民の配置がある。ここに南米系集団に対する「異化」された存在として「隔離」されている彼らの現状が観られる。つまり、沖縄系住民は「同化圧力」、南米系住民は「隔離」という現状をみようとしているといえる。

本研究ではこのように、「食」の分析にとどめず、文化接触領域に暮らす人々の置かれている社会的状況を読み解いていった。

【通信欄】

（研究代表者記入）

プロジェクト	■次世代　□次世代ユニット　□男女共同参画に資する調査研究		
経費	予算額　450(千円)	実績額	450(千円)

様式 2

最終成果報告書（ワーキングペーパー）のホームページ公開に関する許諾書

研究成果タイトル

文化接触領域の食からみる家族と伝統

グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」に提出する上記の最終研究成果報告書（ワーキングペーパー）の PDF ファイルを同プログラムのホームページに公開することについて、下記のように返答します。

2011 年 3 月 31 日
最終研究成果報告書（ワーキングペーパー）
の執筆者全員のお名前（自署捺印）

記

■許諾する。

□　部分的に許諾する。
許諾する部分を具体的にご記入ください。

□　下記の理由により許諾しない。
□調査対象者の個人情報保護のため
□その他　（具体的に理由をご記入ください）